

ミヤマキリシマの保護、登山道整備活動

高山植物「ミヤマキリシマ」(大分県準絶滅危惧種)の
 増殖に支障となる木(ノリウツギ等)を伐採し、希少種を
 保全するための活動を実施しています。

また、山の草花が踏み荒らされたりしないよう登山道
 の整備も行っています。

2017年度は、4月と11月に実施し、九電グループ社員
 やOBを含む184名のボランティアの方々に参加いた
 だきました。



支障木の伐採



登山道の整備

坊ガツルリーフレットの制作・配布

従来の活動に加え、ラムサール条約で求められている
 「保全」と「活用」の観点から、登山道入口への外来植物の
 種子の持ち込みを防ぐマットを設置したほか、湿原を守る
 ためのルール、周辺のガイドマップや四季の花々など
 を掲載したリーフレットの制作・配布を行っています。



外来植物の種子除去マット



リーフレット

生物多様性の保全

生物多様性に配慮しつつ九州の豊かな自然を守り続けていくため、社有林や発電所緑地の適切な管理や、九州で絶滅が危惧される身近な動植物を保護するための取組みを推進しています。

社有林等の適正管理

当社は、水力発電の安定した水源確保を目的として、阿蘇・くじゅう国立公園区域内を中心に4,447ヘクタールの社有林を適切に維持管理し、水源涵養^{かんよう}やCO₂の吸収など、森林の持つ公益的機能の維持・向上に努めています。2005年3月には、適正な森林管理が行われていることを認証するFSC(森林管理協議会)の「森林管理認証^{*}」を、国内の電力会社で初めて取得しました。

社有林のスギ材の一部については、新国立競技場オリンピックスタジアムのスタンド観客席を覆う大屋根の木材として供給しています。

※森林管理協議会(FSC、本部ドイツ)が、環境に配慮した森林管理に対して発行する認証

【社有林によるCO₂吸収固定】

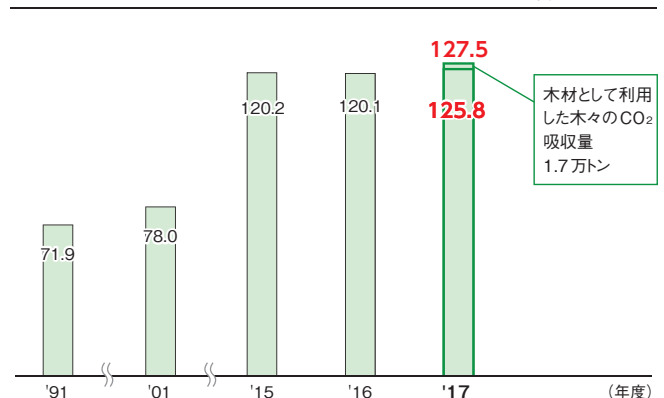
社有林により吸収固定されるCO₂は、木材として利用するために伐採された木々が吸収しているCO₂量1.7万トン^{*}を差し引いても、社有林全体で125.8万トンと算定しています。



社有林(山下池周辺[大分県由布市])

■ 社有林によるCO₂吸収固定量

単位: 万トン-CO₂



(注1) 森林調査に基づく実測値から日本国温室効果ガスインベントリ算定方法に基づき算定
 (注2) '01年度までのCO₂吸収量には樹齢15年以下の若木分は含まない

「くじゅう九電の森」における生物多様性調査の実施(九州林産株)

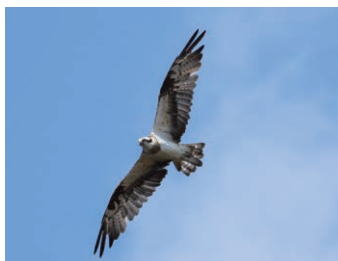
グループ会社の九州林産株では、九電みらい財団が環境教育活動を実施している大分県由布市(山下池周辺)の「くじゅう九電の森*」が、より生物多様性に富んだ環境となることを目指し、その環境づくりに向けた現地調査に着手しました。(※内容はP51に記載)

現地調査では、専門家を招き、多様な生物が集まる環境づくりへのアドバイスをいただきました。また、その中で大分県の準絶滅危惧種に指定されているツマグロキチョウ*¹やミサゴ*²などの多様な生物を確認しています。

四季を通じた生物多様性調査を実施し、その結果を指標にすることで、取り組み成果の見える化を図っています。



ツマグロキチョウ



ミサゴ



現地調査の様子

※1:ツマグロキチョウ:シロチョウ科の昆虫で、河川敷や堤防の草地などに生息。従来は普遍的な種とされていたが、河川の改修工事などで、個体数が急激に減少しており、全国的に絶滅が危惧されている

※2:ミサゴ:タカ科の鳥類で、海岸、河口、湖沼などに生息、大木の樹上や岩や崖の上で営巣する。餌となる魚類の化学的な汚染により、世界的に個体数が減少している

指定管理者施設における生物多様性調査の実施(九州林産株)

グループ会社の九州林産株は、福岡市から同市西区の「かなたけの里公園」の管理者に指定されており、同公園で日本野鳥の会福岡支部と協働し、野鳥を中心としたモニタリング調査を実施しています。

開花植物や動物、昆虫などの調査もあわせて実施しており、2017年度は、12回の調査で、サメビタキ(スズメの仲間)をはじめ、敷地内では初めて見つかった2種を含む計62種の野鳥、136種の開花植物を確認しました。

また、公園内の湿地や水路で、福岡県の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているニホンアカガエルの産卵が確認されており、卵塊の調査と保全活動を実施しています。2017年度は、349の卵塊を確認しています。



イカルチドリアオバズク
(畑の糸に絡まっているところをスタッフに助けられました。)



ニホンアカガエルの卵塊